CREATION MINISTRIES INTERNATIONAL

創造の確かな証拠

STONES AND BONES

カール・ウィーランド 著

松原 弘明 訳

Bible&Creation

しかし、科学とは・・・？

科学はすばらしい学問分野です。しかし、現代社会に多くの衝撃を与えたある種の科学は、過去を検証しようとする科学とは全く違っています。それは、月に人を送り込んだ科学であり、今現在この世界で機能している法則に関する全てのことです。その科学は、測定したり、現象を観測したりすることが可能で、いつでも、また、何度もその現象を再現して確認することができるというものです。一方、再現不可能な過去に何が起こったかを打ちたてようとする科学は、必然的に、それとは全く別次元のものです。

探偵や、科学捜査官の仕事について考えるなら、彼らは慎重に手がかりを集めて調べ、次に、それらを推理してある種のストーリーに当てはめていきます。同一の証拠が多くの違ったストーリーに当てはめることが可能で、その捜査官が信じていること、すなわち、先入観や、根本にある考えに大きく影響されてしまうのです。たとえば、私たちほとんどの人は学校で、進化論者が主張するように爬虫類が何千万年前に鳥になったということを「科学として」習いましたが、そのことを決してテストして確認することはできません。それが実際起こっているところを観測できないからです。同様に、普段目にする、種類にしたがって繁殖するようにプログラムされた多くの鳥や爬虫類は、創造主によって奇跡的に創造された、と言い切ることもできないのです。

いずれの考えも信仰です。それぞれの信仰体系（進化論と創

造論）は議論を呼び、そして証拠はその信仰を支持するのです。いずれの信仰も、同じ証拠、同じ観測を共有しています。創造論科学者が支持していること、それは、理にかなった論理的な信仰体系であり、現在観測可能な豊富な証拠に裏づけされています。

創造論科学者は、すべての答えを持っているわけではない

創造の枠組みの中にも、未解決の問題や、答えられない疑問はあります。しかし、それは進化論でも同じです。毎年、何十億ドルもの税金が進化論に関する疑問の解決のために使われていますが、それに比べ、創造論科学者の研究に使われるのはわずかです。

それにもかかわらず、この数年間に、困難と思われたいくつかの問題が、創造論科学者らによって解明されました。（その研究過程で、以前に創造論者によって提唱されていた考えや示唆のいくつかは修正または破棄されねばなりませんでした。これは科学においては当然のことです。）

進化論、それは、すべてのものが、超自然的な介入なしに、それら自体が持つ自然の性質によって自らを作り上げてきたという、起こりそうにないことを（宗教的に）信仰することと言えます。物質とエネルギーの源である「外部」からの助けなしに、混沌が宇宙になった、すなわちすべて自ら、素粒子ができて、惑星になり、そして椰子の木、ペリカンや、人間になっ

たというのです。これが、どのようにして起こったかという説明（すなわち、進化の仕組み）は移り変わってきましたが、進化はともかくも起こったという根底にある仮定が、今日、多くの人のゆるぎない信念となっています。

ある人たちは、進化の過程に「神」を関連付けようとしますが、ほとんどの場合、進化論者たちは、知性的な計画があることを示唆するような提案があると、そのすべてを強く否定します。多くの「有神進化論」の科学者（進化論と神の両方を信じると主張）でさえ、進化の過程は全く自然に起こったと主張しています。すなわち、無数の生物が、多くの局面で闘争、苦しみ、死ぬことを通して、強者が弱者を無情にも一掃してきたという進化論的な‘創造の過程’は、数十億年かけて脈々と続いてきたと想定されているのです。

なぜ、それが問題ですか？

１． 進化論は無神論を正当化することです

創造主がいないと主張する人は皆、デザイナーなしでこの自然を説明しようとして進化論を用います。無神論、不可知論、そして、それらに関連した世俗的人間中心主義のような宗教的世界観、人生観を持つ多くの人たちにとって、進化論は不可欠な土台となっています。すると、必然的に次のようなモットーに至ります。『もし、われわれを創造したものがいないのなら、われわれはだれのものでもない。それで、われわれ以外に規則

を作るものはいないのだ。たとえば、聖書に、盗んではならないという律法があるが、もし、旧約聖書の他の記事が単なる教義的な作り話なら、それに縛られる論理的な理由はない。』

２．キリストの福音に反する立場をとってしまうことです

聖書（それは、クリスチャンたちが、創造主自らの聖なる啓示であると主張している）全体を貫いている原理は、創造主は、ご自身と、その中に善い世界（死もなく、闘争もなく、暴力も、虐待や流血もない）を創造されたという首尾一貫した啓示です。最初の人であるアダムが、彼を創造した主から離反（罪）した結果、この宇宙すべてが、創造主に呪われたのです（創世記３章、ローマ書８章）。

しかし、死や苦しみなどが入ったことは、一時的な侵入であって、いずれこの世界は回復され（使徒３：21）、何十億年もかけて、死、虐待、流血に終始するのではなく、罪のない、死もない、初めにあったような世界に回復されるのです。

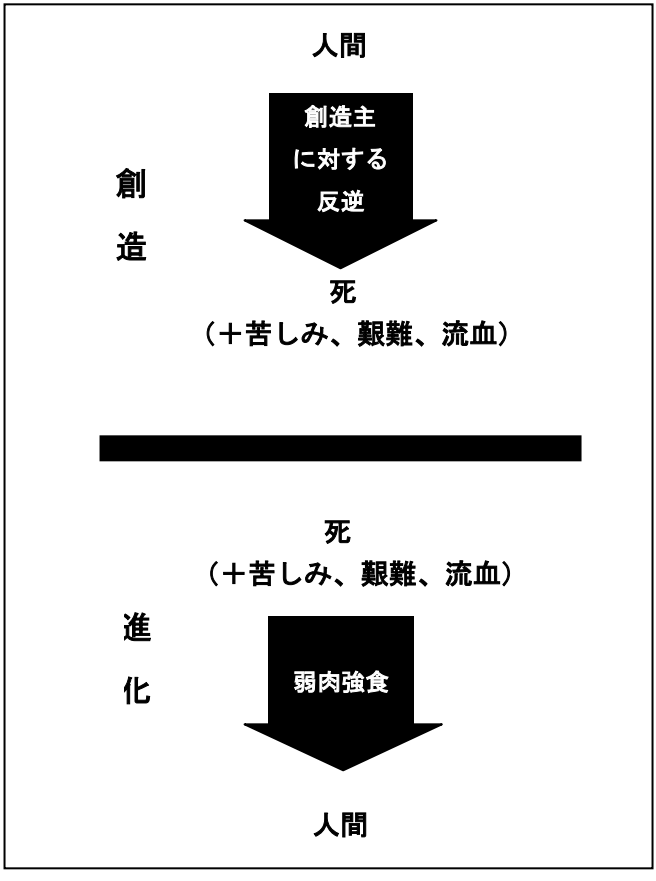
イエス・キリストは、創造主が肉体をとって来られ（最後のアダム）、信じる者をその罪から贖い回復するだけでなく、全世界を、アダムの離反によってもたらされた死と流血の呪いから最終的に開放されるために無実の血を流して死なれたのです。

もし、進化で言う歴史が本当なら、この福音（よい知らせ）の意味は完全に失われてしまうのです。なぜなら、アダムの前に祖先がいて、流血の世界の中で、爪で引っかいたり、打ち叩

いたりして互いに死に至らしめてきたからです。それは、また、創造された世界が、アダムの堕落によって呪われたことは神話に過ぎないことになってしまいます。

イエス・キリストのよい知らせ、すなわち、福音（創造主との関係を永遠に回復できる）が真理であると言えるのは、私たちの祖先であるアダムが創造主から離反した結果、最初にあった創造主と人との調和が壊れてしまったという悪い知らせが全く真実である、ということによるのです。第１コリント 15：21～22 では、はっきりと福音をアダムがもたらした死に結び付けています。「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」　結局のところ、創世記に対する疑いは、非常に多くの人に聖書全体を疑わせることになってしまいました。[注1]

[注1] クリスチャンの中に‘何億年’という年代を支持しようとする人たちがいます。しかし、そのことは進化論と同時に‘知性あるデザイン’も否定してしまうか、‘漸進創造論’（創造主が何億年かけて段階的に創造した）になってしまいます。このどっちつかずの立場は人の心を響かせず、求道者をむしろ不信仰に教育していませんか？ それは、さらに、聖い創造の‘何億年間’に、おびただしい数の死や流血が存在したことになり、創造主は創造の終わりに「非常によかった。」とは仰せられなかったはずです。そして、また、イエス・キリストのことば、すなわち創造の初めから人が存在したのであり、創造の何億年も後ではない（マルコ 10：6、マタイ 19：4）ことと矛盾します。ローマ１：20 は、創造主の力は、世界が創造されたときから、被造物によってはっきりと示されている、と告げています。


人間
創造主
に対する
反逆
創
造
死
（＋苦しみ、艱難、流血）
死
（＋苦しみ、艱難、流血）
進
化
弱肉強食
人間

しかし、万物が６日間で創造されたという創世記の記事は、文字通り地球の６回の自転を意味すると、どうしてわかりますか？　他の解釈も可能ではないのですか？

私たちは、正直のところ、創世記は実際にあった本当の歴史を記しており、それ以外の何物でもないと考えています。最も指導的立場にあるヘブル語学者によれば、世界レベルのヘブル語大学の教授たち[注2]は、創世記の 1～11 章は、近い過去に万物が通常の日の６日間で創造され、そして、全地球を覆った破壊的な洪水があったことを告げている、ということで一致しています。そのことは、その教授たちが、何かそう信じる必要があるということではなく、創世記の言語自体が、その著者にそれ以外の意図があったはずがないことを示しているからに他なりません。創世記は、十歳の子供にもはっきりわかるように書かれていることは明らかです。

率直に言いましょう。― 創世記を他の解釈、たとえば、「日と日の間に長い時間があったとする解釈」や、「１日は長い時代であったとする解釈」などでとらえようとするのは、聖書に基づくのではなく、聖書を別の信念（進化論の長い地質年代）に合わせようとする意図によるのです。

注2　ジェームス・バー、オックスフォード大学欽定講座教授は、創世記の字義通りの信仰としてではなく、ヘブル語学として述べています。クリエーション誌 19（1）：23－25,1996
creation.com/sixdays 参照。

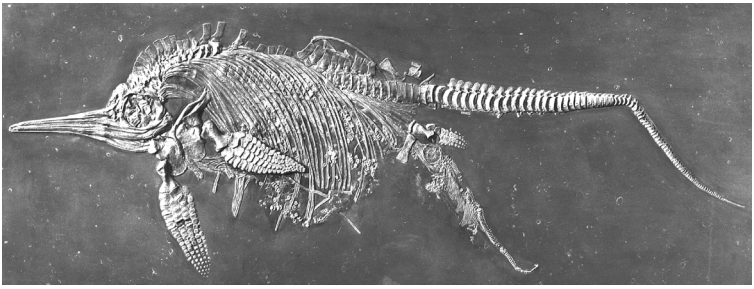
ちょっと待って！

　あなたはこう質問するかもしれません。もし、アダムの前に死と流血がなかったのなら、世界中の水で堆積した地層中に何十億もの死骸が埋まっており、それらの中には暴力やガンなどの痕跡が見つかるのはどういうことですか。

そのことは、全地球が水によって破壊されたという聖書の記事、すなわち、アダムの後にあった「ノアの洪水」の結果であると考えられませんか？　実際、化石は、ほとんどの人が信じているようなゆっくりしたプロセスではなく、急激に埋没したことを示しているのです。たとえば、非常によくウロコやヒレが保存された魚の化石が大量に見つかっています。自然界では、すぐに腐肉を食べる動物に引き裂かれたりして、ばらばらに分解されてしまいます。魚が速やかに埋没し、その堆積物（泥や砂）も速やかに固まったのでなければ、そのような特徴は保存されることはありません。

しかし、石炭は何百万年以上かけて、沼地でゆっくりとつくられたのではないのですか？

　巨大な森が根扱ぎにされて沈殿し、急激に埋没した、すなわち急速に石炭が形成されたことを示す圧倒的な証拠があります。

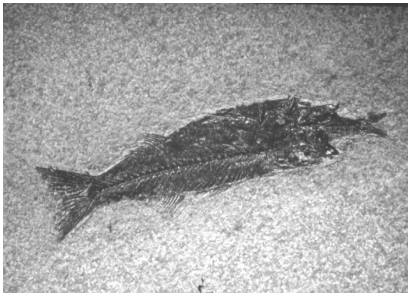


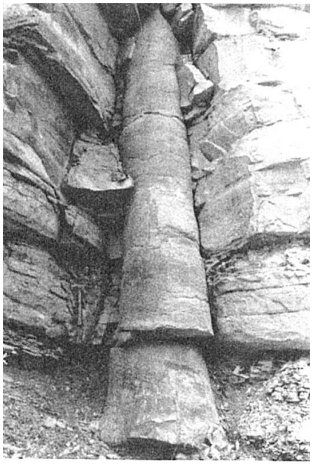
写真：スタートリッヒ自然史博物館（シュトットガルト）
出産中に化石になったイクチオサウルス（絶滅した海洋爬虫類）。よく保存された様子は、母と子が海底に沈んで膨大な時間をかけて徐々にできたはずがありません。

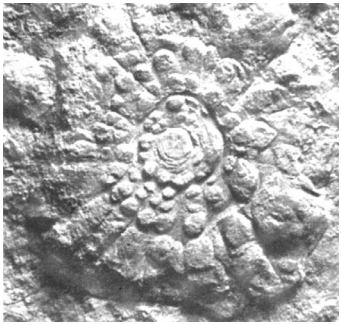
オーストラリア、ビクトリア州ヤローンというところに、今日、沼地では育つことのない針葉樹の丸太を多数含んだ巨大な褐炭層があります。広範囲にわたって、厚い全層の５０％は全く花粉から成る層が分離して存在します。それは、これらの層が、まぎれもなく、水によってつくられたことを示しています。さらに、多くの南半球の石炭層では、森が育っている場所ならあるはずの土壌の化石の手がかりすら見つかりません。[注3]

アルゴン国立試験場（米国）の研究者たちは、次の手順で、良質の黒い石炭ができることを示しました。リゲニン（木の主

[注3] 北半球のいわゆる「根土」に見られる石炭は、その細切れの根が、その土の中で育ったのではなく、実際は水に浮いていたという圧倒的な証拠です。(C.Wieland, Forests that grew on water, Creation **18**(1):20-24, 1995. creation.com/floatingforests)







左上： 食事中に急速に埋められた魚

右： 木の幹の化石（珪化木）が地層を貫いて存在しています。このような化石は石炭層でよく見られます。化石の形成に長い時間がかかったなら、なぜ、上部は腐らなかったのでしょうか？

左下： クラゲは死ぬと１日で溶けてしまいます。オーストラリア南部のエディアカラ付近の砂岩層、１千平方キロメートルにわたって何百万ものやわらかい生物の化石が埋蔵されています。泥水がこれらの生物を埋め尽くし、急速に固まって、わずか１日か　２日でこの地層全体が形成されたことを示しています。

要成分）を酸活性粘土と水に混ぜ合わせ、空気を遮断したガラス管の中で、150℃に加熱します。地質学では実際、それは全く高い温度ではなく、また、その成分も例外的あるいは不自然なものではありません。そのプロセスに必要な時間はたったの４～36 週間であり、何百万年ではありませんでした！[注4]

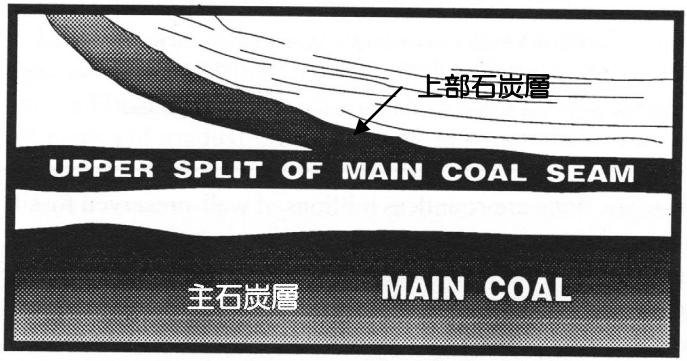
石炭薄層が二股に分かれていることはよく知られていますが（次ページの図参照）、‘Z’の形に形成されていて、他の石炭薄層と互いに結合しています。オーストラリアの著名な地質学者、エッジワース・デイビッド卿は、1907 年の報告の中に次のように記しています。ニューキャッスル（オーストラリア）の石炭薄層で、石炭化した木の幹が直立してそれらの層をまたいでいます（16 ページの珪化木のように）。それらの木の幹は下端を石炭薄層に埋め、その上の中間層を直角に貫き、それらの上端は上の石炭薄層に達しているのです！

長い時間を隔てた二つの沼地で、ゆっくり形成されるというプロセスでこのことが説明できるでしょうか。石炭の起源は、水による大災害で草木が激しく引き裂かれ、急激に埋没した可能性がありますが、「ゆっくりと、徐々に」という先入観が、その明快な説明を除外してきたことは明らかです。[注5]

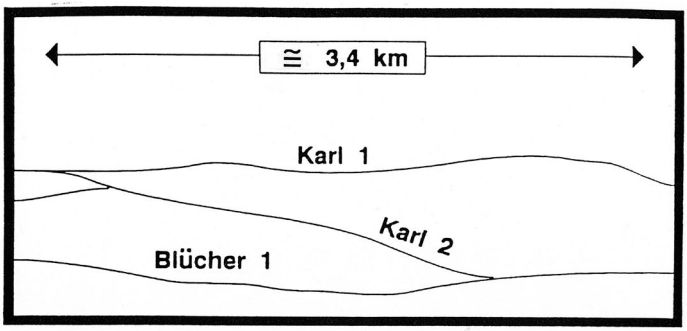
ほとんどの人が、何億年かかったに違いないと思うような膨大な地質学的な営みを、水流、特に大量の水は短時間でやってのけるのです。次ページ右の写真は、ある日の午後に堆積して

注4　Organic Geochemistry **6**:463-471, 1984.

注5　証拠となる多くの災害の詳細は、ＤＶＤ”RagingWaters”（CMI）



石炭層の分岐（写真からのスケッチ The Geology of Pittsburgh Coal; in pp.32-111 of the Proceedings of the Second Conference on the Origin and Constitution of Coal, Crystal Cliffs Nova Scotia, 1952）



ドイツ、オーベルハウゼン～ドゥイスブルグにあるＺの形をした石炭層の合わせ目。何百万年も時を隔てた沼地がこのような石炭層を形成できるはずがありません。

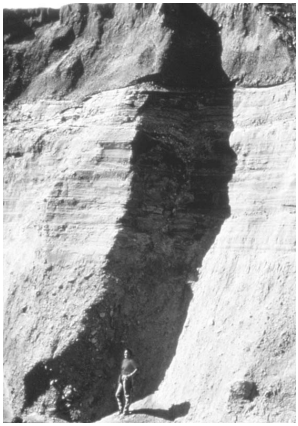
できた８ｍの地層で、合衆国のワシントン州にあるセント・ヘレンズ山の１980 年の噴火で起こった大激変によるものです。この山が頂上を吹き飛ばし、そして、続いて起こった爆発で、地すべり、泥流、そして堆積現象が起き、最初の爆発の時以来180m以上も堆積岩の層が積み重なりました。[注6]

同じようなことが、チャネルドスカブランズ峡谷で見られます。今では、ほとんどの専門家が、氷河時代に湖をせき止めていた部分が崩壊して起こった洪水で削り取られてできたと認めています。多くの専門家はまた、長さ８０ｋｍ、幅 1.5～１０ｋｍ、深さ２７５ｍのグランドコーリー峡谷（左の写真）も、同じように湖が崩壊した洪水で花崗岩の岩盤が削り取られてできたと考えています。

多くの地質学者たち（かつての何億年という考えを支持していた多くの学者を含む）が、今では、グランドキャニオンは同じような大災害で形成されたのであって、コロラド川が何億年もかけてゆっくり削り取ったのではないと言うようになりました。

さて、１年に及んだ、すべての山を覆うノアの洪水がありました。それは、地殻全体が裂け、外部に水が（当然マグマも）噴出して起こった大激変です（創世記７：11 には「巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け」と記されています）。その恐るべき災害が、想像を絶するほどの莫大な地質変動をもたらしたのでしょう。

注6 ＤＶＤ“Mount St.Helens”（CMI）参照



左： グランドコーリー峡谷　　右： セントヘレンズ山の地層

化石は進化を示していますか？

ダーウィンは、率直に次のように記しています。「もし、私の理論が正しいなら、莫大な数の「中間種」の化石が見つかるはずである。たとえば、もし、爬虫類の前足が鳥の翼になったとすると、中途半端な足、中途半端な翼、中途半端なうろこ、中途半端な羽毛　――　といったような、徐々に次の段階に移行していく一連の化石が見つからないのはなぜだろうか。」

ダーウィンはそのような中間種の欠落は、彼の理論に対する最も明白、かつ重大な反論になるだろう、と述べていたのです。百二十年後、アメリカの大きな博物館の館長であるデイビッ

ド・ラウプ博士は、「ミッシングリンクの状況はほとんど変わっていない。進化論で移行型と考えられたものは、ダーウィンの時代よりもむしろ少なくなっている。」と述べています。[注7]

大英自然史博物館の古生物学者コリン・パターソン博士は、進化論者ですが、化石の専門家で、進化論の重要な著書を著しました。ある人が彼に、「なぜ、あなたの本の中には、中間型（移行型）のイラストが全くないのか？」と尋ねたとき、手紙で次のように答えています。

「私が書いた本の中に、進化論で移行型と考えられたイラストがないとご指摘くださいましたが、全くそのとおりです。もし、化石、あるいは生きているもので、そのようなものを私が何か知っていたなら、まちがいなく本に載せたでしょう。そのような移行型を視覚化するのに、画家に依頼することを、あなたは提案しておられます。しかし、そのような情報をどこから入手できるでしょうか？正直言って私はそのような情報を提供できません。それで、もし私が画家の資格を持った人にゆだねて描いてもらうなら、読者を誤って導くことにならないでしょうか？

私は4年前に本を書きました。（著者は、その本の中で、いくつかの移行型があることを信じていると述べている） もし、今、その本を書くなら、かなり違ったものになると思います。私は、生物は徐々に変化してきたと考えていますが、それはダーウィンの

注7 本書のすべての引用（注釈の有無にかかわらず）についてはCMI：The Revised Quote Book（改訂版引用書）参照。

説に従ったのではなく、私が遺伝というものを理解するために、それが必要だと感じたからです。しかし、著名な化石の専門家であるステファン・J・グールドとアメリカ博物館の人たちは移行型の化石がないという矛盾に困惑しています。私自身も、古生物学者として、化石の記録から祖先の形質を特定することの原理的な難しさに圧倒されているのです。あなたは、私に少なくとも、「いろいろな器官の由来となった化石の写真を見せるべきだ」とおっしゃる。なるほどそれを一つの線の上に置くことはできるでしょう。しかし議論の余地のない化石は一つもないのです。」[注8]

どういうことでしょうか？　進化が事実なら、当然、何百何千万の中間種があるはずです。幾人かの進化論者はいくつかの（ほんのわずかの）中間種の化石があると主張します。しかし第一線の専門家の多くはそれらの化石を否定しているのです。不思議な化石上の生きもの、「始祖鳥」についてあまり知られていないことがあります。始祖鳥はしばしば、爬虫類と鳥類の両方の特徴を備えているという理由で、移行型の例として取り上げられましたが、決定的な移行途上の形質は何もありません。そのことゆえに「移行型」かどうかという議論を巻き起こしてきました。羽毛は十分な形をしており、翼も翼として適切なものです。木に止まる鳥の特徴である後ろ向きの爪、弧を描いた

注8　パターソンは、このことや、同様のことをはっきり言ったために進化論学会から非難を浴び、柔らかい表現に改めました。しかし、明瞭かつ正確に記しています。

足を持っています。それは進化論者が復元しようとした、羽毛の生えた走る恐竜のようなものでは決してありません。[注9]

始祖鳥

[注9] 恐竜から鳥になったという主張について、その中間種とされたものも含め、詳細解説はウエブサイトで。 creationon.com

現在、生きている生物のいくつか（たとえばカモノハシ）も、通常、異なった類に見られる特徴を寄せ集めて持っています。哺乳類のような毛、アヒルのようなくちばし、ビーバーのような尻尾、蛇のような毒腺を持ち、爬虫類のように卵を産み、子供を乳で育てるというこの小さな奇妙な生き物は寄せ集め形態のよい例です。しかし、今挙げたそれぞれ２つの生物の間で変化していく途上の中途半端な状態を示すようなものではありません。

全てにおいて中間種が欠落していることは、「人への進化」についても当てはまります。「祖先」として主張され、多く羅列されていることを考えれば、きっと驚かれるでしょう。ここでは、いちいちそれらの主張がどのように変わったかということは取り上げませんが、20 世紀に広く声高らかに「祖先」として主張されたものが、新たに代替候補が見つかる意外は、密かに捨て去られたことがわかっています。

今日、アウストラロピテクス／ハビリスが盛んに取り上げられ、その代表的なものとしてルーシーという骨格の化石が最もよく知られています。チャールズ・オクスナード博士は、進化論解剖学者の一人ですが、膨大なサンプルをコンピュータで多変量解析（先入観にとらわれない客観的な方法）によって念入りに調べた結果、それらの生物は人間の祖先であるとは信じていません。オクスナード博士は、アウストラロピテクスは、当初、人間に近いものか、もしくは類人猿と人との中間と考えられたが、実際は、人間でも、アフリカ類人猿でもなく、それらのグループとは全くかけ離れた独自のものである、と述べてい

ます。博士は、「化石を見つけた当事者らが属さない研究グループ」では、これらの生き物は人間の祖先ではありえないとする研究者が増えたことを指摘しています。また、それらは直立歩行したといまだに多くの人が主張しますが、最近のCATスキャンで臓器をバランス配置して分析すると、直立歩行できなかったという結果が出ています。このことは、最近になってゴリラやチンパンジーのように握りこぶしで歩行するためのロッキング構造がルーシーの手に発見されたことと意味が一致します。

（左）は、「ルーシー」という名で有名になった化石。
特別なヒト科の骨格と見なされ、（同類の骨格を含め）人類の祖先とされたが、すでに人類学者ら専門家によって否定されています。（本文参照）

ホモ・エレクトスについてはどうでしょうか？ ホモ・エレクトスとはっきり定義された骨格は、まず間違いなく洪水後に生きていた人間であり、民族の多様性の表れです。[注10]

犬はその骨格に大きな差異が見られます。チワワとグレートデーンを比べてみてください。選び取ると、そのような差異はわずか２、３世代で現れます。洪水後の急激な環境変化は自然選択を速め、そして、（創造主がバベルで人々を離散させたので）小さな集団に分離したことは、民族が急速に孤立し、（あらかじめ存在していた）遺伝情報の多様性を際立たせるのに最適な要因となりました。「民族」の多様性は骨格の特徴にも表れています。

民族間の特徴の幅広い多様性と比較するなら、エレクトスと呼ばれるものと人間の骨格の差異は、あまり大きなものではありません。おもしろいことに、ネアンデルタール型（脳容積は現代人の平均より大きい）は現代人型と同じ時代に生きていたことが今ではわかっています。インドネシア島でステゴドン（絶滅した象）に関連して残っていた道具が発見されたことにより、進化論科学者アラン・ソーン博士は「人類出現以前の祖先」は航海術と技術を持っていたと主張しました。しかし、1993 年に博士は、「それらは、ホモ・エレクトスではなく（そ

注10　ホモ・エレクトスとされた骨の破片の中には、必要に迫られて分類されたものも多くあります。エレクトスタイプの骨は現代人の骨と同時代とされるところで発見されました。また、エレクトスの特徴とされたことは、現代人の中にも多く見つかっています。

う呼ぶべきではなく)、人間である」と言っています。[注11]

もし、進化論科学者らの時代と分類の基準で、発見された「ヒト科」の化石のすべてを図示すると、すぐに進化の考えが混迷していることがわかるでしょう。[注12]

注11　オーストラリア人、1993 年 8 月 19 日。当時、ソーン博士はオーストラリア国立大学の古代文化人類学者でした。

注12　M.Lubenow 著「Bones of Contention」（ＣＭＩ）参照

実際、進化は起きていますか？

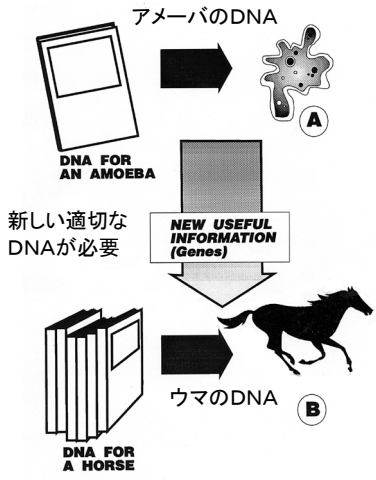
一言でいえば、いいえ、です。確かに、生物は多様に変化しますが、いっこうに‘進化論がいうような方向’に向かいません。それはこういうことです。今では周知のことですが、すべての生き物はプログラム（青写真や処方箋のような指導要領）を持っており、そのプログラムが、たとえばワニになるか、アボガドの木になるかを決めます。人間について言えば、そのプログラムが、茶色の目になるか、青い目になるか、直毛になるか巻き毛になるかを決め、実際そのとおりになります。このような情報は DNA と呼ばれる長い分子に書かれています。[注13]

比較的単純な生物、たとえば、単細胞アメーバのようなものから、ウマのようなはるかに複雑なものになったと進化論では教えます。ところが、最も単純なものとして知られる単細胞生物でさえ目をまわすほど複雑ですが、ウマほどの情報を持っていないことは明らかです。目、耳、血液、脳、ひずめ、筋肉などの造り方を指示する情報を持っていません。それで、29 ペ

注13　ＤＮＡは単独では生物学的に意味がありません。ちょうど無意味な文字を寄せ集めたようなものです。その化学分子の‘文字’が、意味ある情報を持つように特別な並びで綴られ、さらに細胞にある複雑な機械で‘解読’されることによってのみ、生命組織の構成や活動をコントロールします。この並びはＤＮＡを構成している化学物質自体から発生しません。ちょうど、インクと紙の分子（あるいはばらばらにしたカルタ）自体が意味ある文を綴ることがないのと同様です。特別な意味を持つＤＮＡ分子の並びは、‘外部’、すなわち（両）親のＤＮＡの指示で綴られることによってのみ発生するのです。

まっすぐな髪？それともカールした髪？白い肌？それとも
黒い肌？それらの情報はあなたのＤＮＡに書かれています。

ージの図の A から B へ移行するには、各段階において適切な情報が増し加わる必要があります。その情報は、有益、かつ複雑な新しい構造や機能のために暗号化されているのです。もし、この種の情報がいくらかでも増加するような変化を見つけたとしたら、たとえ、長い時間があれば魚が哲学者になるという考えを支持するとしても、それは理にかなっています。しかし、実際は、そのような情報が増加するという変化は、みごとなまでに見つからないのであり、このことは、すべての争点を葬り去るのに十分です。進化の例とされたことは、必ず情報の減少が起こっているのに、逆に進化を支持する誤った方向に用いられてきました。そのことを検討しましょう。



今日の生物が実際に微々たるものから進化してできたのなら、（何冊もの本のような）莫大な量の情報が DNA に増し加えられなければなりません。

自然選択は進化ではない

生物は、ご存知のことですが、自分自身の中に持っている情報をコピーして、次の世代に伝えるようにプログラムされています。男性の DNA は精子にコピーされて伝えられ、女性は卵子によって伝えられます。このようにして父と母の遺伝情報は次の世代に伝えられます。私たちは皆、平行した 2 本の長い遺伝情報の「ひも」を細胞の中に持っていて、いわゆる、その一本は母から、もう一本は父から由来したものです。[注 14]（結び

注 14　ヒトでは、この「ひも」は染色体という 46 の部分に分割されますが、ここではそのことは重要ではありません。

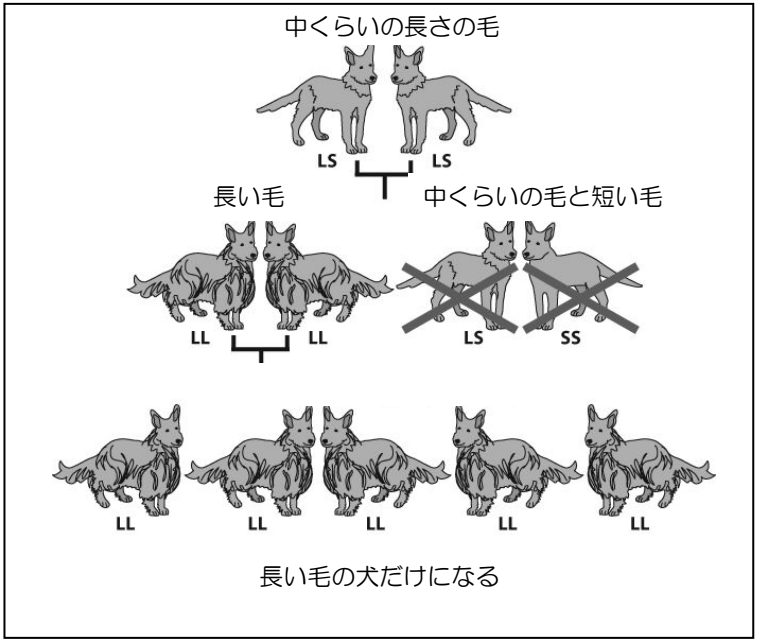
合わされたひもにモールス信号がのせられていると考えてみてください。DNA は細胞の複雑な機械装置によって解読されなければなりません。）

両親からは、それぞれが持つ情報の半分（毎回違う半分）だけがコピーされます。そうでなければ、一つの家庭の子供はすべて同じになってしまいます。両親からの同じ遺伝情報が多くの違った組み合わせでトランプを切るように分けられ、再結合することで、ヒト、植物、動物など、あらゆる集団に多様性をもたらすのです。

単純な例で考えてみましょう。――中くらいの長さの毛の犬の両親から生まれた仔犬が部屋いっぱいにいるとしましょう。何匹かの仔犬の毛は両親よりいくぶん長く、何匹かはいくぶん

犬の多様性

短いということがあるでしょう。しかし、このような多様性が出現するのに、新しい情報が増し加わったのではなく、その情報は、最初の二匹の犬にすでに存在していた、ということははっきりしています。それで、育種家はより長い毛のものをとって交配させ、さらにその子孫から最も長い毛のものをとり、これを繰り返していくと、短い時間で、「新しい」タイプの長い毛の犬ができても驚くようなことではありません。後にその子孫はすべて長い毛を持つようになります。しかし、新しい情報



は増し加わっていません。育種家が欲しいと思う犬を単純に選び（育種家の目にかなったものの遺伝子のみが引き継がれた）、それ以外のものを選ばなかった、ただそれだけのことです。

選択で遺伝情報を蓄積しているDNA全体の長さは変化しません。それで、一旦、「長い毛」の遺伝子の数が満ちると、それらは以前に「短い毛」の遺伝子が配置されていた位置をも占めてしまいます。それで、長い毛のものは、長い毛と短い毛の両方の遺伝情報を持っていた中くらいの毛の祖先よりも情報が減少したということになります。（31ページの図参照）

自然は、あるものを選びとり、他のものを拒絶するのです。与えられた環境、たとえば、非常に寒いところでは、長い毛の犬が生き残り、そうでないものより遺伝情報が残り易いのです。自然選択では、ある情報は有利に働き、ある情報は失われるでしょう。しかし、そのことで、新たな機能をもたらす複雑な情報は創り出されてはいません。

進化論では、突然変異、すなわち遺伝情報が偶然、かつ、でたらめにコピーされることで新しい情報が発生すると言います。そのような間違いは起こり、遺伝します。その次の世代もその欠損のあるコピーをさらにコピーするからです。そのように欠損が引き継がれ、さらなる間違いが起こって、突然変異の欠損が蓄積していきます。このことは、突然変異的負荷、または、遺伝的負荷が増しているのであって、進化ではありません。

人間においても何千ものそのような遺伝的欠損があり、それらが引き起こす遺伝的疾患によって知られています。その中には、鎌状赤血球貧血、嚢胞繊維症、地中海貧血、フェニールケ

トン尿症、などがあります。高度に入り組んだ暗号の中に、たまたま変異が起こって、病気や機能不全を起こしても不思議ではありません。[注15]

有益な突然変異？

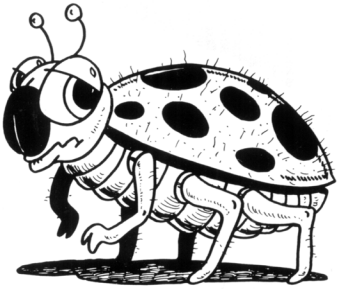
突然変異は圧倒的に、有害か、意味のない遺伝子の‘雑音’のいずれかでしかないことを進化論科学者らはよく知っています。にもかかわらず、彼らが信じる理論体系（進化論）は、「時折、上向きの突然変異が起こったに違いない」という信念に基づいているのです。実際、ちょっとした突然変異が起こることは知られていますが、それが与えられた環境で生き残った結果、一見有益に見えても、新たに‘上向き’の情報が増し加わったわけではありません。ですから、突然変異で進化は起こりえないのです。洞窟に棲む魚は、突然変異で目を失ったほうが（光がないので目は役に立たない）目の傷病がないので生存に有利です。また、海の中にある風の強い島では、羽のあるカブト虫より、羽を失ったもののほうが風に飛ばされて溺れることが少ないので、生き残り易いのです。しかし、目がなくなっ

注15　これらのまちがいは通常、自然選択で完全には除去されません。両親から受け継ぐ同じ部分に欠陥がある場合にのみ問題が現れるので、ある個体は何の被害も受けずに遺伝子の欠陥を受け継ぎます。――　事実、わたしたちすべてはＤＮＡに多くのそのような欠陥を受け継いでいます。

たり、羽ができるのに必要な情報を喪失あるいは崩壊したりすることは、それがどのように見えようとも、欠損、すなわち、既にあった機能構造の一部を失ったということです。[注16]

生き残りに‘有利’という意味だけで、このような欠陥は巧みに論点を避けてきましたが、実際、上向きの情報、すなわち新しい機能、新しい機械プログラム、新しい有益な構造のための暗号が増し加わった例をどこに見ることができますか？

昆虫が殺虫剤に耐性を獲得することも、突然変異によって進化したしたということではありません。ほとんどの場合、集団の中に、殺虫剤に耐性を示す遺伝情報を持つ少数の個体が既に存在しています。[注17]



注16　進化論者が‘有益な突然変異’の適例として用いたものに鎌状赤血球貧血があります。確かにマラリアに感染しにくいということはありますが、役に立たないヘモグロビンを造ることしかできない傷ついた遺伝子を受け継いだだけです。両親から受け継ぐと致命的です。

注17　Scientific American 誌 239（3）:1978 年 9 月：p.48～61 Francisco Ayala の記事「The Mechanism of Evolution」参照

集団の中で耐性を持たない蚊がDDTによって駆除されてしまい、耐性を持つものが生き残って繁殖したとすると、死滅した大多数が持っていた遺伝情報は、少数生き残ったものの中にはもはや存在しません。その集団からは永久に失われたのです。[注18]

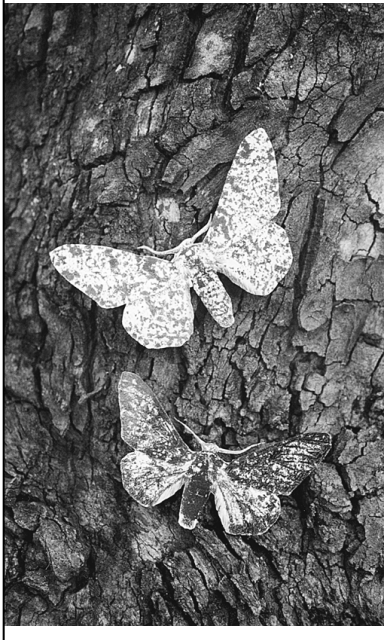
生物に実際起こっている遺伝的な変異に注目するなら、情報量は同じ（いろんな方法で再結合しただけ）か、あるいは、壊れたか失った（突然変異、絶滅）のであって、情報が実際‘上向きに’増し加わって進化したというようなことは一切確認されたことがありません。[注19]

注18 バクテリアの抗生物質に対する耐性についてもそうです。耐性をもたらす遺伝情報を、別種の菌からも受け継いだ可能性があります。突然変異で抵抗能力が増大したいくつかの例があります。たとえば、細胞膜の搬送性が悪いバクテリアは、ある種の抗生物質を吸収しません。そのような突然変異は、結局のところ不利です。というのは、特定の抗生物質の圧迫を取り除くとすぐに、抗生物質に弱いタイプが増殖してもとにもどってしまうからです。突然変異による殺虫剤に対する耐性はこのようなことで起こっています。

注19 観念的に、微量の情報なら、間違いによってでも増し加わるのではないかと考えられています。しかし、イスラエルの生物物理学者リー・スペトナーは彼の著書に、進化論が要求するような、今日見られる大規模な情報が偶然の間違いによってできることはありえない、と記しています。

オオシモフリエダシャク蛾 ― 暴かれた詐欺！

有名になった英国のオオシモフリエダシャク、木の幹にとまっているようす



環境汚染で木の幹が黒くなると、黒っぽい蛾が、日中にえさを探してついばむ鳥からカムフラージュされるので、白っぽい蛾より数が増えたといいます。

これは、単なる自然選択の現われに過ぎず、全く新しい情報ができていないのに、長い間、進化論者らによってもてはやされました。

ところが、だましが暴かれてしまいました。この蛾は日中、木の幹にとまる習性はありません！蛾のはく製を接着剤やピンで木に貼り付けて写真を撮り、‘進化の証拠’として発表されたのです。

（Creation 誌 21〔3〕:56, 1999. C. Wieland ‘Goodbye Peppered Moths: A classic evolutionary story comes unstack’）

考えてみましょう

このようなことは思いもよらなかったのではないですか？　情報が伝えられるとき（情報が再生されるときも）、その情報は同じか、減少するということは、情報理論においても常識からもはっきりしています。増し加わるものは意味のない雑音だけです。[注20]

無生物でも生物でも意味のある情報が自然に発生したり増し加わることは決してありません。ですから、総合的に世界中の生物やそれらの生命組織について考えると、何度も情報のコピーを繰り返すので、その情報の総量は、時間とともに減少しつつある、ということです。過去に遡ってみれば、情報は増加しているにちがいありません。どちらかというと退化しているのです。

このプロセスを永遠に過去に遡ることはできないので（無限の過去に無限に複雑な生物がいたということはない）、このことは、この複雑な情報に始まりの時があったはずである、ということになります。

物質から（科学の観察に基づく限り）自然にそのような情報ができることはありません。 とすると、唯一の代案は、創造の意図をもつ

注20　例としては、カセットテープをくり返しコピーする、フロッピーディスクのコンピュータプログラムやデータファイルをくり返しコピーすることなど。良くても、情報は同じ。しかし、十分時間が経てば必ず劣化します。このことは、すべてのものは最高の状態から最も混沌とした状態に無作為に移り行くという傾向を現しています。常に無秩序が最大になるように移り変わるのです。この傾向は‘衰退の法則’で知られる熱力学第２法則として検証されています。

者が、‘外部から’物質に情報を吹き込み（ちょうどあなたが文章を綴るように）、植物、動物のすべての原種をプログラムした、ということになります。今日見られる生物の祖先のプログラムは奇跡的に（超自然的に）なされたのでしょう。現在の自然法則は情報を創りだすことはないからです。

このことは、神（創造主）が、‘種類にしたがって’繁殖するように生きものを創造した、という創世記の記事と完全に一致します。

たとえば、‘犬種’というものを仮定すると、かなりの多様性（かつ欠陥がない）が埋め込まれて創造され、ただ最初からある情報の組み合わせで多様性が生じて、狼、コヨーテ、ディンゴなどになったということです。

蚊の例でも見てきたように、自然選択は情報を‘選び取り、分類します’が、情報を創りだしてはいません。新しい遺伝情報が増し加わることなく（ゆえに進化していない）、異なった種類と呼ばれるまでに多様な子孫が出現することは十分あり得ます。分かりやすい例として、人為的な選択で亜種（家庭犬）を造り出すうちに雑種の犬が減ってしまっ

ディンゴ

た、ということがあります。亜種とは、始めにあった遺伝子プールからある部分を受け継いだに過ぎません。ですから、チワワだけではグレートデーンのような品種を生じることは決してありません。そのために必要となる情報を失ったからです。

同様に、ゾウの原種は多様な情報を持っていましたが、自然選択によって、アフリカゾウ、インドゾウ、マンモス、マストドン（後者の２種は絶滅しました）などに分化したのでしょう。[注21]

そのような分化は、その種が初めに持っていた情報の範囲内に限られるのは明らかです。このような変異／特殊化が、アメーバがいずれアルマジロになる方法を提供するわけではありません。情報が‘上向き’に増し加わってはいないからです。ある人たちは、そのような遺伝子プールの‘間引き’を‘進化した’という言い方をします。しかし、進化論が言う分子から人に至るような変化のためには、複雑さ（情報）が増し加わることが不可欠ですが、遺伝子プールの‘間引き’でそれが実現できるはずがありません。[注22]

注21　このことゆえに、創造論科学者らは今日、急速に種分化（新種の形成）が起こっているのかが分かって喜びました。――　聖書の短い歴史と一致するからです。

注22　３０年以上前に、指導的な進化論科学者らは、新種ができるのに新しい情報が増し加わっていないことを既に知っていました。参照：　Lewontin, R., The Genetic Basis of Evolutionary Change (Columbia University Press), p.186, 1974.

ベレソフカマンモス、サンクト・ペテルブルグ博物館
写真：　Dennis Swift